様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｈ０２３３５

研究課題名（和文）メコン川中流域を中心とした諸言語の言語実態と変容プロセスの研究

研究課題名（英文）A Study of Languages and Linguistic Change in Middle-Mekong Region

研究代表者
林　範彦（Hayashi, Norihiko）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：４０４５３１４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,400,000円

研究成果の概要（和文）：メコン川中流域に展開するチベット・ビルマ諸語、タイ・カダイ諸語、ミャオ・ヤオ諸語、オーストロアジア諸語はいずれも消滅の危機に瀕する言語でありながら、記述言語学・歴史言語学的研究が他の言語群に比して多くない。本課題では現地調査を行い、チノ語・アク語・ロロポ語・カレン語・ミャオ語・セーク語・ビット語などのデータ収集を行なった。またそれに基づき、各言語の歴史的な音韻変化や動物語彙の記述などを行い、3巻の論集を発行できた。京都および神戸で国際ワークショップを開催し、国内外の科研メンバー以外の研究者との交流も進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
メコン川中流域の諸言語は、その語族を問わず、大言語と比較して研究データの蓄積が乏しく、研究者も限られている現状にある。本研究課題では、代表者、分担者、協力者が協力して現地調査を行い、歴史言語学的な分析を通じて、これまで記述されていなかった新たな情報を収集することに成功した。また、この地域の言語群における音韻、形態、統語的な歴史的変化を部分的に解明することができた。これにより、文字を持たない社会が大半を占める本地域の言語について、貴重なデータを残すことができ、将来的にはこれらの言語の背景にある歴史学的・人類学的分析の基礎を築くことができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The languages of the Tibetan-Burman, Tai-Kadai, Miao-Yao, and Austroasiatic families in the midstream region of the Mekong River are all critically endangered, yet they have not received as much attention in descriptive and historical linguistics research compared to other language groups. In this project, we conducted fieldwork to collect data on languages such as Jino, Akeu, Lolopho, Karen, Miao, Saek, and Bit. Based on this data, we documented the historical phonological changes and the lexicon related to fauna for each language, culminating in the publication of a three-volume series of papers. Additionally, we organized international workshops in Kyoto and Kobe, facilitating interactions and collaborations with researchers beyond the domestic and international members of our research team.

研究分野：言語学、記述言語学、東南アジア地域言語学

キーワード：メコン川　チベット・ビルマ諸語　タイ・カダイ諸語　ミャオ・ヤオ諸語　オーストロアジア諸語　言語接触　記述言語学　歴史言語学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、東南アジア大陸部を貫くメコン川中流域における言語の多様性とその変容プロセスを解明することを目的としている。この地域は、チベット･ビルマ諸語、タイ･カダイ諸語、ミャオ･ヤオ諸語、モン･クメール諸語がモザイク状に複雑に分布しているという特異な言語状況を持つ。これらの言語は、地理的･社会的な接触を通じて相互に影響を与え合い、言語変容が進行している。特に、都市化やグローバル化の進展に伴い、言語の変化が加速している現状がある。これまでの研究では、各言語がそれぞれ独立に分析されてきたが、本研究では語族を超えた横断的な分析を行い、言語変容のダイナミクスを明らかにすることを目指している。

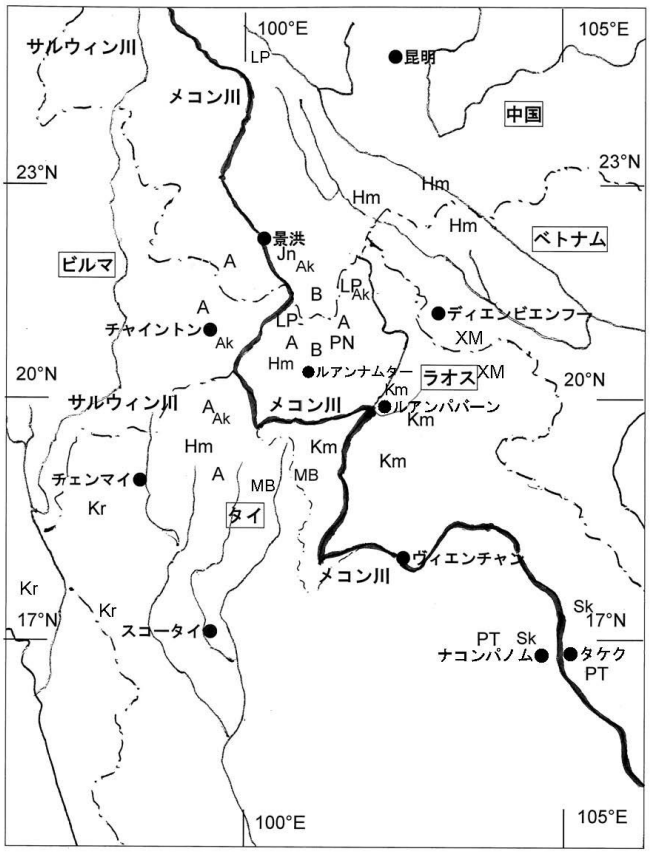

図 1: メコン川中流域を中心とした諸言語の位置

この地域の言語研究は 19 世紀末から西洋の宣教師や言語学者によって始められた。例えば、チベット･ビルマ諸語では Liétard や Vial が中国のロロ語を、Hanson がミャンマーのカチン語を記述し、ミャオ･ヤオ諸語では Pollard がミャオ語の文字を創始するなどの業績がある。第二次世界大戦後、中国では民族分類の必要性から言語研究が盛んに行われ、東南アジア地域では欧米の研究者が現地調査を進めてきた。現在までに詳細な辞書や文法書が公刊されている言語も少なくない。

しかし、これらの研究は主に個別言語の記述に集中しており、語族を超えた言語接触や変容の分析は十分ではなかった。特に、東南アジア大陸部北部地域では、河谷盆地に住むタイ･カダイ系の言語集団が他の民族に与える影響についての研究が不足している。このような背景から、本研究ではメコン川中流域に焦点を当て、語族を超えた言語接触と変容のプロセスを明らかにすることを目指した。

代表者の林は、中国雲南省やラオス北部でチベット･ビルマ系のチノ語やアカ語、ロロポ語の記述を行い、タイ東北部のタイ･カダイ系言語の調査を開始している。また、メコン川中流域での動植物語彙の収集を通じて、民族移動や言語接触の影響を分析してきた。この経験を基に、本研究ではチベット･ビルマ諸語(A: アカ語、Ak: アク語、Jn: チノ語、Kr: カレン語、LP: ロロポ語、PN: パナ語)、タイ･カダイ諸語(Sk: セーク語)、モン･クメール諸語(B: ビット語、XM: シンムーン語、MB: ムラブリ語)、ミャオ･ヤオ諸語(Hm: フモン語)などの言語を対象に分担者･協力者と共に現地調査を行い、言語変容のプロセスを総合的に解明することを計画した。

研究開始当初には、現地調査を通じて各言語の現状を把握し、言語使用状況や変容のプロセスを明らかにすることが求められた。

２．研究の目的

本研究の目的は、メコン川中流域における言語の実態を詳細に記述し、言語変容の過程を明らかにすることである。この地域には多様な言語が共存しており、それぞれの言語がどのように相互作用し、変容しているかを理解することは、言語学、とりわけ東南アジア地域言語学における重要な課題である。特に、以下の具体的な目標を掲げる。

1. **言語実態の把握**：メコン川中流域における各言語の現状を詳細に記述し、音韻体系、文法構造、語彙の特徴を明らかにする。これにより、各言語の基本的な構造と使用状況を把握する。
2. **言語変容の分析**：言語接触や社会的要因による言語変容の過程を解明する。具体的には、地域共通語などの影響を受けた言語変化のパターンを明らかにし、どのような要因が言語変容を引き起こしているかを分析する。
3. **動植物語彙の記述**：各言語における動植物語彙の収集と記述を通じて、文化的・生態学的背景を含む言語の多様性を明らかにする。これにより、本地域における言語と文化の関係性を理解する。
4. **文法化現象の研究**：通時的な視点から文法化現象を分析し、言語変化のメカニズムを解明する。

本研究の意義は、メコン川中流域の言語多様性の理解にある。メコン川中流域は、多言語社会の縮図である。本研究では言語接触と変容のダイナミクスを理解し、また語族横断的に本地域の言語の歴史的な変化やその動態の詳細な分析を施す。さらに、消滅の危機に瀕する言語の記録と保存にも貢献する。また、本研究は地域の言語学者等との連携を深め、地域研究の発展にも寄与する。

３．研究の方法

本研究の方法論は、現地調査を主軸に据え、さまざまなデータ収集手法を組み合わせて行った。具体的には以下の方法を採用した。

1. **現地調査**：研究代表者および分担者が定期的にメコン川中流域を訪れ、各言語の話者と直接交流し、データを収集した。これには、音韻調査、文法項目の記録、語彙収集などが含まれる。
2. **ワークショップと研究会**：国内外の専門家を招いたワークショップや研究会を開催し、研究成果を共有し、議論を深めた。
3. **データ分析**：収集したデータを詳細に分析し、言語の音韻体系、文法構造、語彙の特徴を明らかにした。特に、動植物語彙や文法化現象に関するデータは、言語変容のメカニズムを解明するための重要な手がかりとなる。また、チベット・ビルマ諸語、タイ・カダイ諸語、ミャオ・ヤオ諸

語、オーストロアジア諸語の中から、チノ語・アク語・ポーカレン語・セーク語・フモン語・ビット語などの現地調査データを分析し、地域言語学的観点からこれらの言語特徴の解明を進めた。

4. **共同研究**：国内外の研究者と連携し、共同で研究を進めた。動物語彙に関する専門家である James Chamberain 氏や東南アジア地域言語学における歴史言語学的研究で著名な Weera Ostapirat 氏らのフィードバックを得ながら進めた。このことから、音韻・形態の 2 つの側面の分析を進展させた。また雲南省のミャオ語については代表者・林と分担者・田口の合同調査を行った。
5. **成果発表**：国際学会や国内の研究会で定期的に研究成果を発表し、フィードバックを受けながら研究を進めた。例としては、Southeast Asian Linguistic Society, International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics 等の国際会議での発表のほか、各種学術雑誌での論文発表を行った。

4．研究成果

本研究の成果は多岐にわたり、以下のような具体的な成果が挙げられる。

1. **現地調査の進展**： 2017 年度から 2019 年度にかけては現地調査もすこぶる進展したと言える。代表者・林はタイ側のセーク語の基本文例の調査を行うとともに、メコン川の対岸に位置するラオス側のセーク人集落を訪れ、簡単な聞き取りを行った。また代表者・林と分担者・田口で 2019 年 3 月に雲南省文山州のミャオ語の方言調査を実施するとともに、イ語の方言話者や黒タイ語の方言話者との接触にも成功した。分担者・加藤はカーンチャナブリー県サンクラブリー郡サンクラブリー市とその周辺のポー・カレン 3 か村（Sanephong, Laiwabong, Kawsadoeng）において、タイ王国で話されるポー・カレン語東部方言の音韻特徴および文法特徴を把握するための調査を行った。分担者・田口は中国貴州省開陽県にて 2017 年 9 月下旬にミャオ語（西部方言）の調査を行い、移動動詞・テキスト研究を進めた。研究協力者・平野綾香（大阪大学大学院生[当時]）はベトナム北部にてターイ語の基礎語彙調査・音韻分析を行った。

   ただし、その後に発生した新型コロナウイルスの影響は甚大で、特に 2020 年度・2021 年度は現地調査ができなかった。2022 年度・2023 年度は事故繰越期間として延長を認められ、同年 8 月および 2023 年 12 月には代表者・林によるタイ・ナコンパノム県でのセーク語の補充調査が行われた。また分担者・加藤により関東地方在住のカレン語話者の文法調査が進められた。

2. **論文および出版物の発行**：各年度に複数の論文が発表されており、研究成果が学術的に広く共有されている。例えば、2019 年度・2020 年度・2022 年度には「Topics in Middle Mekong Linguistics」という論集が神戸市外国語大学の研究年報として 3 巻発刊され、動物語彙の記述や音韻記述、文法の問題など幅広いテーマが収録された。この論集には、研究代表者・林、分担者・加藤、田口、Badenoch のほか、研究協力者の Chamberlain 氏、倉部慶太氏(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、岩佐一枝氏(名古屋外国語大学)、上述の平野綾香氏の論文が含まれている。

また、分担者・加藤は慶應義塾大学言語文化研究所の論集として『東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル』を発刊し、文法研究の東南アジア的特徴の解明に貢献した。

3. **学会発表など**：各年度で国際会議や学会において多数の研究発表を行い、研究成果の公開と議論を積極的に行った。例えば、2018 年度から 2022 年度には第 51 回-第 55 回国際シナ・チベット言語学会議に参加し、最新の研究成果の発表を行った。また、研究代表者・林や分担者・加藤、田口は、2019 年度の Southeast Asian Linguistics Society の年次大会にも参加し、各人の研究成果を発表した。
4. **共同研究とワークショップ**：国内外の研究者と連携し、共同で研究を進めることで、多くの成果を上げた。例えば、研究協力者・Badenoch により、2017 年 8 月には“Research in Northern Mon-Khmer Linguistics”を京都大学で開催し、モン・クメール諸語の諸問題について討議した。2018 年 1 月にはラオスから James Chamberlain 博士、タイから Weera Ostapirat 教授、カンボジアから Gerard Diffloth 博士(2023 年逝去)を招き、動物語彙の研究ワークショップを神戸学園都市 UNITY で開催し、メコン川中流域を中心とした地域における動物語彙の語族横断的な比較研究を行った。

   2018 年度には James Chamberlain 博士は動物相の語彙研究を進め、京都大学から Kri-Mol 諸語の動物相に関するモノグラフを出版した。Chamberlain 博士の研究成果を基礎に、代表者・林のほか、協力者である Badenoch 氏・岩佐氏・倉部氏も各言語(ビット語・彝語・ビルマ語・ジンポー語)の動物語彙の記述・分析を行った。

5. **データの公開と利用**：収集したデータは論文や学会発表を通じて公開され、他の研究者による利用が可能となっている。これにより、メコン川中流域の言語に関する研究がさらに進展し、地域研究の発展に寄与している。例えば、動物語彙のデータは上述の「Topics in Middle Mekong Linguistics」論集シリーズにて公開され、他の言語との比較研究にも利用されており、言語変化のメカニズム解明に貢献している。

総じて、本研究はメコン川中流域の言語の実態と変容プロセスを明らかにすることに成功し、本地域の言語研究の発展に貢献した。今後も現地調査を継続し、収集したデータを基にさらなる分析を進めるとともに、研究成果を広く共有し、言語多様性の理解促進にも努めていく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計28件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　15件）

１．著者名 Norihiko Hayashi	４．巻 63
２．論文標題 A Sketch of the Mammal Terms in Muang Sing Lolopho-with Reference to Dialectal Comparison	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Research Institute	６．最初と最後の頁 99-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Atsuhiko Kato	４．巻 63
２．論文標題 Eastern Pwo Karen Verbs in 'Up' and 'Down'	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of Research Institute	６．最初と最後の頁 143-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 加藤昌彦	４．巻 1
２．論文標題 ポー・カレン語の事象キャンセル	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『東南アジア大陸部諸言語の事象キャンセル』	６．最初と最後の頁 167-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kato, Atsuhiko	４．巻 54
２．論文標題 Letalanyah: A Buddhist writing system of Sgaw Karen.	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies	６．最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yoshihisa Taguchi	4．巻 63
2．論文標題 A Note on taA/t@A in Lan Hmyo	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Journal of Research Institute	6．最初と最後の頁 177-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Nathan Badenoch and Norihiko Hayashi	4．巻 63
2．論文標題 Continuity and Chang in the Duodenary Cycle: Language Contact in the Laos-China Border Area	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Journal of Research Institute	6．最初と最後の頁 127-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Nathan Badenoch	4．巻 63
2．論文標題 "Crocodiles and dragons": Fauna and Folklore in the Forests of Northern Laos	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Journal of Research Institute	6．最初と最後の頁 37-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Nathan Badenoch	4．巻 63
2．論文標題 naang nok ku@k kap cngas: Lady Bulbul and the Ngeuak	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Journal of Research Institute	6．最初と最後の頁 57-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 James R. Chamberlain	4．巻 63
2．論文標題 Comparative and Historical Glimpses of the Lacertilia (Lizards) in Tai: A Reconstructive Problematic	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Journal of Research Institute	6．最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kato, Atsuhiko	4．巻 1
2．論文標題 "Pwo Karen."	5．発行年 2019年
3．雑誌名 The Mainland Southeast Asia Linguistic Area	6．最初と最後の頁 131-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kato, Atsuhiko	4．巻 60
2．論文標題 "Karen and surrounding languages."	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Topics in Middle Mekong Linguistics (Journal of Research Institute)	6．最初と最後の頁 123-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kato, Atsuhiko	4．巻 51
2．論文標題 A note on the quantifier float in Pwo Karen	5．発行年 2020年
3．雑誌名 eports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies	6．最初と最後の頁 173-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hayashi, Norihiko	4．巻 60
2．論文標題 Notes on Faunal Terms in At Samart Saek	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Topics in Middle Mekong Linguistics (Journal of Research Institute)	6．最初と最後の頁 97-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Badenoch, Nathan	4．巻 60
2．論文標題 The Ethnopoetics of Sida Animal Names	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Topics in Middle Mekong Linguistics (Journal of Research Institute)	6．最初と最後の頁 39-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Taguchi, Yoshihisa	4．巻 60
2．論文標題 On Two Venitive Verbs in Lan Hmyo	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Topics in Middle Mekong Linguistics (Journal of Research Institute)	6．最初と最後の頁 169-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kurabe, Keita	4．巻 60
2．論文標題 Animal Nomenclature in Jinghpaw	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Topics in Middle Mekong Linguistics (Journal of Research Institute)	6．最初と最後の頁 75-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Chamberlain, James	4．巻 60
2．論文標題 The word for 'snake' in Themarou, Bolyu, Bit, Kra, Jiamao, and Oceanic: A Lapita Connection?	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Topics in Middle Mekong Linguistics (Journal of Research Institute)	6．最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hirano, Ayaka	4．巻 60
2．論文標題 The Differences between the Tay and Nung Languages in the Trang Dinh District of Lang Son Province	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Topics in Middle Mekong Linguistics (Journal of Research Institute)	6．最初と最後の頁 151-167
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 林範彦	4．巻 1
2．論文標題 「日本語の起源とチベット・ビルマ諸語－パーカーと西田龍雄の研究－」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『日本語「起源」論の歴史と展望－日本語の起源はどのように論じられてきたか－』	6．最初と最後の頁 53-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加藤昌彦	4．巻 2
2．論文標題 「ポー・カレン語の使役と逆使役」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 池田巧（編）『シナ＝チベット系諸言語の文法現象2 使役の諸相』	6．最初と最後の頁 181-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Atsuhiko, Kato	4．巻 50
2．論文標題 The middle marker in Pwo Karen.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies	6．最初と最後の頁 21-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 林範彦、高翔	4．巻 70
2．論文標題 中国云南省孟力崙阿克語的音系簡介	5．発行年 2019年
3．雑誌名 神戸外大論叢	6．最初と最後の頁 37-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Badenoch, Nathan.	4．巻 48
2．論文標題 “Translating the State: Ethnic language radio in the Lao PDR”	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Journal of Contemporary Asia	6．最初と最後の頁 783-807
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00472336.2018.1462888	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kato Atsuhiko	4．巻 0
2．論文標題 "Entailed and intended results in Japanese and Burmese accomplishment verbs."	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Handbook of Japanese Contrastive Linguitics	6．最初と最後の頁 173-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kato Atsuhiko	4．巻 0
2．論文標題 "Burmese."	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Levels in Clause Linkage: A Crosslinguistic Survey	6．最初と最後の頁 571-613
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kato Atsuhiko	4．巻 49
2．論文標題 "How did Haudricourt reconstruct Proto-Karen tones?"	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies	6．最初と最後の頁 21-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hayashi, Norihiko	4．巻 39
2．論文標題 On the Buyuan Jino Noun Phrase Structure.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『東京大学言語学論集』	6．最初と最後の頁 71-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hayashi, Norihiko	4．巻 68
2．論文標題 A Sketch of the Buyuan Jino Case-Marking System.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『神戸外大論叢』	6．最初と最後の頁 181-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計27件（うち招待講演　0件／うち国際学会　7件）

1．発表者名 Norihiko Hayashi
2．発表標題 Plural Markers in Youle Jino and Lolo-Burmese
3．学会等名 The 55th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Atsuhiko Kato
2．発表標題 Lae Kwe Kaw: A new "ancient" writing system of Karen
3．学会等名 The 55th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Yoshihisa Taguchi
2．発表標題 Why do you put something when you say you take it?
3．学会等名 The 55th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Kato, Atsuhiko
2．発表標題 Loanwords in Karen from a historical perspective.
3．学会等名 the Mekong Linguistics Meeting, Keio University.
4．発表年 2019年

１．発表者名 Kato, Atsuhiko
２．発表標題 Mermaid construction in Burmese.
３．学会等名 Theoretical Linguistics at Keio 2019-- Myanmar Linguistics, State of the Art.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kato, Atsuhiko
２．発表標題 Negation in Pwo Karen.
３．学会等名 STL meeting, at Kyoto University.（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hayashi, Norihiko
２．発表標題 Notes on Faunal Terms in At Samart Saek.
３．学会等名 he 29th Annual Meeting of Southeast Asian Linguistics Society.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hayashi, Norihiko
２．発表標題 /bi/ in Menglun Akeu: “GIVE” and voice in Loloish.
３．学会等名 the 52nd International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 林範彦
２．発表標題 チノ語および周辺言語における “ evidentiality strategies ” の諸問題
３．学会等名 語の類型的特徴をとらえる対照研究会　第11回公開発表会
４．発表年 2019年

１．発表者名 加藤昌彦
２．発表標題 「ポー・カレン語の数量詞遊離」
３．学会等名 メコン川中流域を中心とした諸言語の言語実態と変容プロセスの研究 2018年度第1回研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 加藤昌彦
２．発表標題 The Anticausative in Pwo Karen.
３．学会等名 The 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics,
４．発表年 2018年

１．発表者名 加藤昌彦
２．発表標題 「ポー・カレン語の事象キャンセル」
３．学会等名 東南アジア諸言語研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 加藤昌彦
２．発表標題 「ポー・カレン語の「文語体」について」
３．学会等名 文法の動的体系性を探る(1)：文法の多重性と分散性
４．発表年 2019年

１．発表者名 林範彦
２．発表標題 A Phonological Sketch of Akha Chicho.
３．学会等名 The 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics.
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nathan Badenoch
２．発表標題 “Survey of Northern Mon-Khmer Expressives”
３．学会等名 Expressives Kaken Final Partners Meeting
４．発表年 2019年

１．発表者名 Osada Toshiki and Nathan Badenoch
２．発表標題 “Dictionary of Mundari Expressives: Building a Comparative Lexicon”
３．学会等名 Expressives Kaken Final Partners Meeting, Center for Southeast Asian Studies
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nathan Badenoch, Nishaant Choksi and Madhu Purti
２．発表標題 “Expressives as Moral Propositions in Mundari”
３．学会等名 40th International Conference of the Linguistic Society of India
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nathan Badenoch
２．発表標題 “Word Formation in the Sida Fauna Lexicon”
３．学会等名 メコン川中流域を中心とした諸言語の言語実態と変容プロセスの研究 2018年度第1回研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 田口善久
２．発表標題 COME and GO in Hmong-Mien
３．学会等名 International Seminar on Languages and Linguistics in Middle Mekong Region
４．発表年 2018年

１．発表者名 加藤昌彦
２．発表標題 「隣接言語との関係から見たカレン語の語順と借用語」
３．学会等名 メコン川中流域を中心とした諸言語の言語実態と変容プロセスの研究　研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 林範彦
２．発表標題 「中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」
３．学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用「参照文法書研究」研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kato Atsuhiko
２．発表標題 How did Haudricourt reconstruct Proto-Karen tones?
３．学会等名 International Seminar on Languages and Linguistics in Middle Mekong Region
４．発表年 2018年

１．発表者名 加藤昌彦
２．発表標題 ビルマ語の事象キャンセル
３．学会等名 東南アジア諸言語研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nathan Badenoch
２．発表標題 “The Pramic Fauna Lexicon”
３．学会等名 Special Workshop on Faunal Lexicons in Mainland Southeast Asia
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nathan Badenoch
２．発表標題 “Bit Morphology: Productive processes and transparent fossils”
３．学会等名 International Seminar on Languages and Linguistics in Middle Mekong Region
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nathan Badenoch
２．発表標題 “Silence, cessation and stasis: Animating ‘absence’ in Bit expressives”
３．学会等名 017 Annual Conference of the American Anthropology Association
４．発表年 2017年

１．発表者名 Nathan Badenoch
２．発表標題 “The Bit-Khang Complex”
３．学会等名 International Seminar on Mon-Khmer Linguistics
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	田口　善久 (Taguchi Yoshihisa) (10291303)	千葉大学・大学院人文科学研究院・教授 (12501)	ミャオ・ヤオ諸語

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	加藤　昌彦 (Kato Atsuhiko) (30290927)	慶應義塾大学・言語文化研究所（三田）・教授 (32612)	カレン諸語
研究分担者	Ｂａｄｅｎｏｃｈ　Ｎａｔｈａｎ (Badenoch Nathan) (50599884)	京都大学・国際戦略本部・特定准教授 (14301)	モン・クメール諸語、チベット・ビルマ諸語

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 Research in Northern Mon-Khmer Linguistics	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 International Seminar on Languages and Linguistics in Middle Mekong Region	開催年 2017年～2017年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関